留学して国際的視野を広げよう！

東京医科歯科大学　名誉教授
川　口　陽　子

【略歴】

1955年　神奈川県生まれ
1979年　東京医科歯科大学歯学部卒業
1979年　東京医科歯科大学歯学部予防歯科学講座助手
1994年　オーストラリア・メルボルン大学歯学部客員研究員
1996年　東京医科歯科大学歯学部予防歯科学講座講師
1998年　米国・NIH/NIDR、デンマーク・コペンハーゲン大学
　　文部省在外研究員
2000年　東京医科歯科大学大学院健康推進歯学分野教授
2020年　東京医科歯科大学名誉教授（現在に至る）

現在は、インターネット等の普及で海外の情報が瞬時に入手できるが、若い研究者には海外留学を経験してほしいと考えている。留学先で歯科医学に関連する新しい知識や技術を学ぶことはもちろん、現地の人々と交流し、異国での生活を十分に楽しんでほしい。海外の歯科医師と友人関係を築くことができれば、帰国後もお互いに情報交換しながらともに成長することができ、歯科医療従事者としての使命感や仕事の喜びを分かち合うことが可能となる。国際的視野を持つと、人は大きく成長するので、研究者にはできるだけ若いうちに留学することを推奨したい。本稿では、留学や国際交流に関連した私の思いと経験を述べてみたい。

大学卒業後すぐに、東京で開催された歯科の国際学会に参加する機会があった。同時通訳が行われていたので、海外研究者の発表内容を理解することはできたが、通訳者は歯科医師ではないので、専門用語の翻訳は不適切であった。そのときに、同時通訳のレシーバーに頼らずに、海外の歯科医師や研究者と直接話し合えるようになりたいと強く思った。

大学受験までは一生懸命英語を勉強したが、入学後は英語を使用する機会が少ないため、ほとんど忘れていた。言語習得には、「読む」「書く」「話す」「聞く」の４つがあるが、「読む」「書く」「話す」の３つは自分のペースで行うことができる。しかし、「聞く」だけは相手の話すスピードやイントネーションについていかなければならず、聞き取りが一番難しかった。そこで、最初に日常英会話をマスターしようと自己学習に取り組んだ。

現在と違って、40年前はテレビの２か国語放送もインターネットもなく、ネイティブの英語に触れる機会は極めて少なかった。忙しかったので、語学教室に通わずに自宅で毎日英語に触れる機会を探してみた。注目したのは、在日米軍向けのFEN（Far East Network）のラジオ放送である。定時に５分間のニュースがあり、ほぼ同じ内容を繰り返している。また、楽しい連続ドラマもあり、

目を閉じて音だけに集中してネイティブの英語発音を聞いて慣れていった。推理小説が好きだったので、通勤時にはアガサ・クリスティの原本をシリーズで読むことにした。最後の殺人トリックを知りたい好奇心から、わからない単語があっても辞書を引かずに意味を推測しながら一気に読み進めていった。好きなことを通して毎日英語に触れていたので飽きることはなく、自然に英語学習ができたと思う。音楽でも映画でもよいが、趣味を通して英語学習するのがお勧めである。

また、外国人研究者が大学を訪問した時には、観光案内役を進んで引き受けて生の英会話を楽しんだ。国は違っても歯科医師という同じ職業なので、一緒の時間を過ごすことは書籍や論文を読むだけでは知りえないその国の最新情報や裏情報が入手でき、各国の歯科保健状況に興味を持つきっかけとなった。また、それぞれの国の歯科界が抱えている問題等について語り合う貴重な機会となり、海外の歯科医師からみた日本の課題にも気づかせてくれた。食事や観光などの楽しい思い出を共有することで、著名な海外研究者とも親しくなり、歯科医師の友人も増えていった。歯科の専門用語は英語論文や書籍を読んだり、国際学会での発表体験を積むうちに、自然に理解できるようになった。いつしか海外研究者の講演を逐語通訳できるようになり、海外の大学や学会から英語で特別講演を依頼されるようになった。

メルボルン大学歯学部長の Clive Wright 教授（地域歯科保健学講座）から招聘され、オーストラリアに留学した。英語にはある程度の自信があったはずなのに、最初は現地の英語がわからず苦労した。大学の先生たちはわかりやすい英語をゆっくり話してくれるので理解できたが、市場に買い物に行くと現地の人が話す英語が聞き取れず困ってしまった。オーストラリアではなまりの強い英語が話されており、「君の英語はアメリカンなまりだ」と笑われた。慣れるしかないと覚悟を決めて暮らしていたら、1 年後には私もオーストラリアなまりの英語を話していた。

これは帰国後に利点となり、大学で留学生を受け入れる立場になったとき、アジア出身者の少し変な英語発音を理解できることに気づき、オーストラリアに留学した成果だと感謝している。英語は伝達手段なので、ネイティブのようにペラペラ話せなくても、相手に対して関心があり、伝えたい内容があればコミュニケーションはとれるものである。「正しい発音で正確な文法で話さねばならない」と構えてしまい、英語が嫌いになってしまう日本人は多い。実際は多少発音が悪くても、単数や複数、現在形や過去形を間違えても相手は理解してくれる。留学のメリットは「英語が上達する」ことよりも、「英語による失敗を恐れなくなる」度胸が身につくことだと思っている。

メルボルン大学では学生教育にも関わり、講義や実習にも参加することができた。また、保健省に申請して外国人歯科医師免許を取得して大学病院内で歯科治療を行うこともできた。研究ミーティングに参加するときに、「一言も話さないのは出席していないのと同じだ」と言われ、必ず自分の意見を述べるよう求められた。保健省との交渉や歯科医師会との合同会議などにも同席させてくれたので、貴重な経験を積むことができた。当時、オーストラリアではダイバーシティ改革が進められていて、例えば大学の教員選考の際には、能力が同じならば男性より女性を、白人より有色人種を、年配者より若い人を選ぶことになっていると聞いて驚いた。しかし、現在、日本でもダイバーシティが推進されており、振り返ってみれば日本の未来の姿を暗示していたことに気づかされる。

米国への留学時には、NIH の NIDR の疫学部門の Alice Horowits 先生に師事した。そこでは噛みタバコによる口腔がんの予防キャンペーンを推進していた。その活動評価のためにフォーカスグループインタビュー（FG）の手法を用いた研究を実施していて、私も調査員として参加した。質問票調査の実施、課題の抽出、FG の企画、参加者とモデレータの選定、実施場所の準備、FG の

実施、評価分析など、新しい研究手法を企画段階から学ぶことができた。参加者の話す言葉をデータとする研究だったので、英語の聞き取りができるようになっていて助かった。

口腔がんの調査時に、野球の神様と呼ばれるベーブルースは噛みタバコを愛用しており、口腔がん（咽頭がん）で50代の若さで死亡したことを知った。子どもが憧れる野球選手やフットボール選手の多くは試合中も噛みタバコをチューイングガムのように使用していたので、子どもが真似をして12歳から噛みタバコを使用し、20歳で口腔がんで死亡した症例も報告されていた。また、口腔がんで舌や顎を切除して顔が変形したスポーツ選手が出演して、子どもたちに噛みたばこの害を訴える健康教育用ビデオも作成されていた。

米国はたばこ産業の成長とともに経済活動が発展し、たばこ会社の資金援助によって連邦政府の主要な建物が建築されたそうだ。そのため、今でも建物の太い柱にはたばこの葉のリリーフが彫られており、当時のたばこ産業の貢献を示している。その後、法律の変更や禁煙活動の推進により喫煙率は下がり、メディアによるたばこのCMが禁止され、米国内での販売が低下したたばこ会社は、日本や韓国に販路を広げていた。以前、日本人の喫煙率は高かったが、現在は下がっている。たばこが売れなくなった日本のJTは海外に進出して、今は東南アジアでは人気の銘柄となっている。また、20年以上前の米国では子どもの虐待のニュースが話題になっていて、日本では聞いたことがなかったので驚いたが、今は日本でも虐待は大きな社会問題である。日本の現在の状況は、米国の過去と同じ状況であることに気づくと不思議な気持ちになる。

留学終了後に大学に戻り、2000年に健康推進歯学分野を開設した。2020年に退職するまでの20年間に、海外の歯科医師を大学院生や研究生として11か国から20名以上受け入れた。日本人学生と留学生が同じ教室にいて英語で話す環境が身近にあることで、国際的な関心が高まったと思う。留学生には、将来、自国の歯科保健問題に対応できる人材となることを期待し、それぞれの母国の歯科保健課題をテーマに研究指導を行った。可能な限り、私も現地に行って一緒にフィールド活動を行ったが、新たな発見が多く大変興味深かった。

東南アジア諸国では乳歯う蝕が蔓延していて、そのまま放置されている国が多く、公衆衛生学上の大きな問題となっている。現地調査をすると、「むし歯の洪水」だった過去の日本と同じ状況である。しかし、日本がこれまで実践してきたことをそのままその国に応用することは不可能である。歯科医師数は少なく、予防を行う歯科衛生士などの職種はなく、保健所や保健センターなど母子歯科保健活動を推進する施設や制度はない。各国に適した理想的なシステムの構築は外国人ではなく、その国の人が実施しなければならない。留学生は母国と日本の懸け橋となってくれる存在である。現在の日本の歯科保健医療システムを知るだけでなく、それが構築された過去からの変遷の歴史も一緒に学ぶことが必要だと考えている。

短期間の海外旅行と違って、海外で一定期間生活することによってその国の文化や歴史、伝統、食習慣、風習等への理解が深まる。留学することは、水平軸による日本から外国への距離的な移動だけではなく、時間軸からみた過去、現在、未来など時空への移動をも可能にしてくれるすばらしい体験である。留学することで、世界にはいろいろな人がいて、日本とは異なる生活様式で多種多様な考え方をしていることに気づかされ、国際的な日本の立ち位置や役割を自覚することもできる。留学によって幅広い視野が得られ、その後の人生が深く、楽しくなることは確実である。

ぜひ、若いときに留学にチャレンジしてほしい。